



Title	再帰代名詞の分離先行詞についての一考察
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	Osaka Literary Review. 1992, 31, p. 23-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25448
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

再帰代名詞の分離先行詞についての一考察

岡 田 禎 之

0. 導 入

まず、以下に anaphor (ここでは再帰代名詞に話を限定する) の性質の一つである、分離先行詞 (split antecedent) を取れるかどうかに関するいくつかの引用を挙げてみる。

- (1) 一般に、代名詞は分離先行詞をとり、再帰照応形が分離先行詞をとりえないことはよく知られている。 (生成文法の方位 p.207)
- (2) In order to assign *proprio* the feature [-pronominal] we can appeal to the split antecedent test, that can work well as an operational test, even if the reason why pronouns can have split antecedents and anaphors cannot is not clear.
(Giorgi 1983/84 pp.308-309)
- (3) PRO in these configurations cannot take a split antecedent, just as a reflexive cannot, in contrast to pronouns that can take a split antecedent. (Chomsky 1986 p.125)
- (4) Reflexives cannot have independent reference, but require an antecedent to take their reference from.¹⁾ (Radford 1988 p.25)

ここでは、anaphor (再帰代名詞) は split antecedent を取れないという考え方が示されているが、このような考え方は以下のような例文に関する考察から導き出されている。

- (5) a. * Gianni_i brought back Maria_j to themselves_{i+j}.
[* Gianni_i ha ricondotto Maria_j a se stessi_{i+j}.]
(Giorgi 1983/84 p.309)²⁾
b. * ?John_i protected Mary_j from themselves_{i+j}.
(Keenan 1988 p.220)

- c. * The boys_i introduced the girls_j to themselves_{i+j}.
(Lebeaux 1984/85 p.346)
- d. * John_i told Mary_j about themselves_{i+j}. (Wasow 1979 p.25)

この小論では、このような事例が不適切と判断されることが、統語的な制約によるものではなく意味的な制約によるものであることを示し、更に、適切な文脈が与えられた場合には anaphor が split antecedent を取っても十分に容認されうることを示したいと思う。

1. これまで引用されてきた例文の検証

今まで split antecedent をとらない anaphor の事例とされてきたものは、ほとんどが適切な解釈ができないものであり、意味的に認可できないものである。

- (6) * Gianni_i brought back Maria_j to themselves_{i+j}. (= (5a))

ここで、themselves は Gianni と Maria を指すので、Gianni brought back Maria to himself and herself のように考え直してみても良いと思われる。ごく単純に考えてみて、この文には二つの解釈が少なくとも融合している。そのひとつは、Gianni brought back Maria to himself であり、もうひとつは Gianni brought back Maria to herself である。さて、前者は「ジャンはマリアの気持ちを自分のところへ引き戻した」くらいの意味であり、例えば

- (6a) Gianni brought back Maria to himself *with his patient love*.
(Giorgi 1983/84 p.309)³⁾

という自然である。これに対して後者は、「ジャンはマリアの正気を回復させた」という解釈になり、例えば

- (6b) Gianni brought back Maria to herself *with a long psychoanaly-*

tic therapy.

(*ibid.*)

という文脈で自然となる。

つまり、問題の文章は、まったく異質の出来事を描いた二つの命題を一つの表現形式に無理矢理にまとめ込んでしまったような形になるのであり、最終的にどういった特定の解釈が与えられるべきなのか判然としないのである。これはまったく意味をなさない文なのであって、「不適切」という判定が下っても当然なのである。

(7) *?John_i protected Mary_j from themselves_{i+j}. (= (5b))

この例も先ほどと同様に考えることができる。

John protected Mary from himself は、「ジョンが、メリーに対して危害を加えようとする自分を抑えた」という意味であって、

(7a) John protected Mary from himself *because he suffered from an infectious disease.*

という文脈と自然に合致する。これに対して、John protected Mary from herself は「メリーが自暴自棄になりそうなところをジョンが助けてあげた」という意味になり、

(7b) John protected Mary from herself *when she was in the abyss of despair and was about to commit suicide.*

という文脈と合致する。この2つを融合してしまうと、果たして、ジョンが加害者の立場にあるのか、それとも彼は全くの救いの神であるのか、どちらの解釈を選択するべきなのか分からない。解釈不可能であり、必然的に「不適切」の判断が下ることになる。

(8) *The boys_i introduced the girls_j to themselves_{i+j}. (= (5c))

ここでは、X introduce Y to X と X introduce Y to Y という2つの意味

が少なくとも融合しているように思われるが、これはそもそもどちらもおかしい文章である。

(8a) ??The boys_i introduced the girls to themselves_i .

(8b) ??The boys introduced the girls_i to themselves_i .

X introduce Y to Z という文において、紹介者 X は、被紹介者 Y のことを少しは知っていることが普通であり、紹介を受ける人 Z は、被紹介者 Y のことを知らないのが普通である。このような我々の期待と相反する解釈を要求するために、(8a, b) は不適切である。従って、このような解釈を含む問題の文章 (8) が容認されないのもまた至極当然である。

(9) *John_i told Mary_j about themselves_{i+j}. (= (5d))

この例文に関しては、これまでとは異なる取扱いが必要である。何故ならここでは、全く異なる二つの状況が混在していると解釈する必要がないからである。「ジョンがメリーに、自分達二人のことについて語る」ということは十分想定でき得る状況である。現に、そのような状況を表現するための形式として

(10) John_i told Mary_j about the two of them_{i+j}.

というものがある。この表現はごく自然なものであり、十分に容認され得るものである。(6), (7), (8)と(9)の違いは、“the two of them” という表現に変えても前者のグループの表現は容認度に変化がなく、依然として何等意味をなさないままの表現であることから明確になる。

(11) a. *Gianni_i brought back Maria_j to the two of them_{i+j}.

b. *John_i protected Mary_j from the two of them_{i+j}.

c. *John_i introduced the girl_j to the two of them_{i+j}.⁴⁾

(9)の表現は、そのままでは容認されにくいことは事実ではあるが、その表現が描き出そうとしている事態は、十分に有意味なものである。もしそう

ならば、十分な文脈情報を与えてやれば、この表現の容認度は上がるのではないだろうか。(6)~(8)はどのような文脈に置いたとしても、そもそも意味をなさない文であるために容認度に何等変化がないのに対して、(9)の場合には違いがあるのではないだろうか。この問題については、次節で考えてみることにする。

さてこの節を終わる前に、なぜ(9)が容認されないのかについてもう少し考察しておく必要がある。筆者が考えるに、これには幾つかの要因が重なっているようである。まず第一に、(10)のようなより適切で、普通に用いられる表現があるということが挙げられる。この表現を用いずに(9)を敢えて用いるならば、それに足るだけの十分な動機付けが必要であり、それがなければ、後者は自然な表現として受け入れ難くなるであろう。第二に、「ジョンとメリーのことについて語る」という動作の一部分であるところの「メリーについて語る」という事象のもつ若干の不自然さも関わっているように思われる。

(12) ?John told Mary about herself.

メリーのことはメリーがいちばん良く知っているはずであるので、tellという動詞がもっている「情報を与える、教える」といったニュアンスは余り自然ではないのである。他にも原因は考えられるかも知れないが、ここではこの2点だけを挙げておくことにする。もしこのような考え方が正しいのであれば、ここに示した問題が解消されるような文脈においてやれば、(9)の文は容認され易くなると考えられるであろう。

2. 分離先行詞を取る再帰代名詞形

これまで、再帰代名詞が分離先行詞を取れないことを、主として、適切な解釈が与えられないということによって説明してきたが、もしそうであるならば、適切な解釈が与えられるように状況設定してやれば再帰形が分離先行詞を取ることも可能である、という予測がたてられる。そして、事実その

ようである。

- (13) a. Both John_i and Bill_j are famous scholars, and they have done a lot of interesting research together in the past. This semester, John_i asked Bill_j to come to his university and [*PRO_j to lecture with him_i about themselves_{i+j} in his class*].⁵⁾ (M.T. Westcoat P.C.)
- b. John_i and Mary_j were a married couple. Mary became weary of John and wanted to get divorced. But John still loved her, and so he_i asked her_j [*PRO_j to reflect along with him_i about themselves_{i+j}*].
- c. ?John_j and Mary_j will get married next month. They are always talking about themselves, or about their lives in the future. This morning, as usual, John_i began [*PRO_i talking with Mary_j about themselves_{i+j}*].
- d. Mary_j is John's illegitimate child. John_i has been supporting her financially and emotionally since she was a very small girl, but their relation has been kept a secret up until now. Now that Mary has become a grown-up, the time will soon come when *he_i must tell her_j about themselves_{i+j}, i.e. about their secret kinship*.
- e. ?Mary_j and Sue_i were sisters, and they looked exactly alike. Mary was the only one who claimed not to be able to see the resemblance. So one day, *Sue_i showed Mary_j themselves_{i+j} in the mirror* so that she could see their faces at one time and compare.⁶⁾

さて、このような場合はどうして解釈が与えられ易くなるのであろうか。(13a) ではジョンとビルは共同で作業を行うグループであるということが文脈から強く読み取れる。二人の動作は、「自分達二人が行ってきた仕事について、生徒に向かって講義する」という点で同じであり、この二人は共同行為者として同一の動作を行なうものと想定できる。(13b) でも、夫婦はもちろングループとして認定できるであろうし、二人ともが共同行為者と

して「自分達二人のことについて考え直してみる」という同一の作業を行なっている。ジョンがジョンだけのことを、メリーがメリーだけのことを考えていたのでは、そのまま離婚してしまうことになるであろう。ここでは、そのような別々の動作が描かれているのではない。彼らは共同作業として一つの動作を行っているのである。(13c)でも同じ様なことがいえる。これが、1節にあったような複数の異質の事態が単一の文中に共存している場合とは、大きく異なるということはすぐに解るであろう。

引き続き、例文を考察していくとしよう。(13d)では、1節で問題となっていた(9)の表現形式が用いられている。しかし、このような文脈に置いてみるとかなり容認度は上がるようである。ここではまず、(12)の文が持っている不自然さは解消されている。メリーのことをメリー以上に知っているのはジョンであり、彼女に真実を知らせるのはジョンしかいないのであるから。更に、このような劇的な状況では、話者のジョンとメリーに対する感情移入の度合いは強くなり易いと考えられるが、もしそうであれば、代名詞形“the two of them”よりも、“themselves”が好まれたとしても不思議ではない。再帰形が、話者の登場人物に対する感情移入と強く関わっていることは、文学作品などでてくる再帰形表現を見ても明らかである。もちろんジョンとメリーの二人は秘密を分かち持っているたった二人の人物なのであり、グループとして認定することは十分にできるであろうから、二人を指し示すのに“themselves”という単一の表現を用いることに違和感はないであろう。

最後に、(13e)を考えてみる。これまでは、「話す、考える」といった verbal action や mental action の動詞が用例に用いられていたが、ここでは物理的な動作動詞が用いられている。しかし、同じ物理的状況といっても(6)~(8)までと、この(13e)の状況とでは、大きな違いがある。ここで描かれている状況は、「スーが鏡に写っている」状況と「メリーが鏡に写っている」状況の二つが別々に存在しているというのではなく、「スーとメリーが二人同時に並んで一枚の鏡に写っている」という、客観的に見て一つの状況でしかないのである。このような場合には、はるかに容認度の高い文として

認められるようである。

これまでの考察をまとめると、『単一の文中に複数の異質の出来事が共存している場合には容認できないが、そこに描かれた状況が一つの出来事として想定できる場合には容認度は上がる』といえるのではないだろうか。

3. 一般的な意味上の制約

さて、我々が通常一つの単文を用いて出来事を陳述する場合、そこに生じている出来事は単一の出来事であると考えられる。

- (14) a. John bought a book at the store.
b. Mary had lunch at the restaurant at 12:30.⁷⁾

もしそのような考え方が正しいのであれば、一つの単文において複数の異質の出来事を同時に陳述するような表現形式は不適切なものとして排除されると考えられる。これは、1節で観察してきた通りである。これとは反対に、2節で観察した例では、このような煩雑さが極端に減少し、我々が期待するように一つの単文によって一つの出来事（少なくとも我々がそのように想定できる出来事）が描かれているのである。

「anaphor は分離先行詞を取れない」という一般化は、そもそも何故そうでなければならないのかという理由づけは与えられていない。(2)で Giorgi も認めているように、それは一種の作業仮説にすぎないのである。しかし、その意味的な側面を考えてみると、実は

- (15) 『一つの単文は、一つの出来事を描写することが期待される』

というごくありふれた、当然とも思える言語使用上の原則に違反している為にそのように見えるだけなのではないかと考えられる。そして、この言語使用上の期待が十分に満たされるような場合には、2節で観察したように、anaphor は分離先行詞を取れるのである。

4. まとめ

分離先行詞を取る再帰代名詞形が生ずることは滅多にないということは事実である。それには、非常に厳しい条件がついているからである。まず語彙的な制約として、先行詞となる要素2つと、更に再帰代名詞が生じる位置の3つを要求する少なくとも3項動詞であることが必要であり、さらに、putのように3項動詞といっても場所を要求するようなものではなく、oneselfという形を自然に要求するものでなければならないということが挙げられるであろう。更に、ここで考察したように、強力な意味的な制約として、2つの先行詞がグループとして認定できるものであり、かつそこに表現される動作が単一の動作として想定できるようなものでなければならないのである。このような要件すべてを満たす構造がそうそうあるはずもなく、それ故に、再帰代名詞は分離先行詞を取らないと信じられてきたのであろう。

しかし、容認される用例が少ないということと、容認され得ないということは全く違うのであって、もしここに述べたような観察が正しいのであれば、「anaphor は分離先行詞を取り得ない」という常識は、慎重に問い直されなければならないであろう。

注

- 1) 「再帰代名詞が単一の先行詞を要求する」という記述は、ほとんどの文法書に見受けられるが、これは「再帰代名詞は分離先行詞を取らない」という前提から生まれてくる記述であると思われる。
- 2) 角括弧内のイタリア語の例文を Giorgi 自身が論文の中で英訳したものであるが、この英訳例にしても容認されないことは同様である。
- 3) Giorgi は(6a, b)を、anaphor が単一の先行詞を取るときには文法的であるが、(6)のように分離先行詞を取ると非文法的になるということの例証として挙げただけで、何故そうなるのかなど、それ以上の議論はしていない。なお、(6a, b)の斜字体は筆者によるものである。

- 4) (11c)では、“the two of them” という表現と数を一致させるために、先行詞をそれぞれ単数形に変えてある。
- 5) (13a, b)ではPROはコントロール動詞askの補文の主語位置にあるので、その目的語によってコントロールされることになる。(13c)ではPROがbeginの主語によってコントロールされることに議論の余地はないと思われる。
- 6) 二重目的語構文で直接目的語位置に代名詞形が用いられることに対しては、文体的に好ましくないという判断が下されるようで、その分だけ容認度は下がるようである。
- 7) John bought many books. のように複数形名詞が導入された場合には、そこには複数の動作が認められるが、これらはいずれも同質の動作であり(つまり、「本を買う」という同じ動作が複数あるということ)、(5)のような異質の動作が共存している場合とは違っている。このような場合には、それを複数形を用いることによって、全体を一つの動作として捉えなおして我々は表現しているのではないかと考えられる。

主要参考文献

- Chomsky, N. (1986). *Knowledge of Language: Its Origin, Nature and Use*. Praeger.
- Giorgi, A. (1983/1984). “Toward a Theory of Long Distance Anaphors: A GB Approach.” in *The Linguistic Review* Vol. 3 No. 4: 307-361.
- Hirakouji, K. (ed.) (1990). *Seiseibunpo no Houi*. Shohakusha.
[平河内健治(編)『生成文法の方位』松柏社。]
- Keenan, E. (1988). “Complex Anaphor and Bind α .” in *Chicago Linguistic Society* 24-1: 216-232.
- Lebeaux, D. (1984/1985). “Locality and Anaphoric Binding.” in *The Linguistic Review* Vol. 4 No. 4: 343-363.
- Radford, A. (1988). *Transformational Grammar*. Cambridge University Press.
- Wasow, T. (1979). *Anaphora in Generative Grammar*. E. Story-Scientia P.V.B.A.